

宗教者間対話から考える パレスチナ/イスラエルの平和

11月11日から16日、パレスチナ/イスラエルから、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の宗教指導者で学識者のお三方を日本にお招きし、日本の仏教者や学識者を交えてのシンポジウムや対話、意見交換会を持ちました（東京、京都、大阪で計7回、合計約300名が参加）。

■十二日の公開シンポジウムの様子。それぞれの立場からパレスチナ/イスラエル問題に関して意見を発する宗教指導者たち。



今年の春に、JVCを長くご支援いただいている仏教系NGOのアイユスの会員の方々がエルサレムを訪問されました。その時に宗教者の方々との意見交換をされ、このときの経験をもっと多くの日本の方々とも共有し、またより深い議論をしたいという思いがきっかけとなり、アイユスとの共催で今回の招聘が実現しました。

JVCパレスチナ事業では、「平和創造・平和構築」も視野に入れて活動しています。人々の平和への願いを実現するために、双方の平和に向けた努力、双方を理解するための努力をなんとか手助けしたいと考えています。今回の宗教者間対話もその一助になることを願っています。来日されたお三方は、仏教という宗教の視点に関心を持たれ、対話や教育への支援の必要性や、パレスチナ/イスラエルの問題が「忘れられていない」よう関心を持ち続けてほしいと訴えられました。

今回の対話を通して、共感したこと・学んだことを、一度のイベントで終わるのではなく、平和を求める活動に向けて、今後にどうつなげていくかが、次の課題としてあげられています。以下、来日されたお三方の発言の一部をご紹介します。

ユダヤ教

ユダヤ教ラビ
イエホヤダ・アミル氏

ヘブライユニオン大学イスラエル・ラビ・プログラム長



「ユダヤ教において、神は人間を極めて個別的で個々が特別で唯一の存在として創造された。平等とは、同質ということではない。私たちはこの世界と他者の生命と幸福に対する責任を果たすことを学び、私たちが平等であると同時に、私たち一人ひとりが特別で唯一な個人であることを認識しなければならぬ。紛争状況において、その苦しみを取り除くために力を貸してほしい。イスラエルとパレスチナ双方の苦しみは、対照ではない。しかし、平和の実現のために、苦しむ両者に共感・同情を持つてほしい」

キリスト教

キリスト教司祭
ジャマル・ハデル氏

ベッレヘム大学宗教学部長



「パレスチナのキリスト教徒は、アラブおよびイスラム世界の一部である。私たちは紛争状態に暮らしている。まず、占領は不正義で、終結しなければならぬ。第二に、抵抗は暴力的にも非暴力的にもなりえるが、キリスト教徒は非暴力抵抗を求める。第三は、私たちの立場は原理的キリスト教および人の原則に基づく。全ての人はその尊厳において神の前で平等である。全ての人は同じ権利と義務を負っている。誰も宗教的あるいは政治的理由で他人に支配（服従）させられてはならない。全ての人は安全に生活し自らの独立した政府を選ぶ権利がある。これはイスラエル人もパレスチナ人も同じである」

イスラム教

イスラム教シエイフ
バラカット・ハサン氏

パレスチナ自治政府教育省カリキュラムセンター人文社会科学局人文部長



「イスラム教は相互理解と調和および相互尊重により非イスラム教徒との関係を維持してきた。イスラム教は、キリスト教や他の宗教を尊重するように、ユダヤ教を尊重し敵対的な態度はとっていない。しかし、パレスチナ人は（ユダヤ人国家としての）イスラエルに対して別の見方を持っている。イスラエルがパレスチナにやってきて、その土地を占領し財産を没収したと見ている。それでも、パレスチナ人は平和を信じ、隣人としてのイスラエル人と国連決議や国際法に基づいた公正で恒久的な平和を結ぶことを期待している」